

第1章 歴史になつていく十二月八日

9

総力戦研究所は戦争を止められたか／淵田美津雄と酒巻和男の真珠湾日本人の「戦争の記憶」／「徴兵拒否」は日本にもあつたか
解明が足りない開戦への決定過程／政治指導者の劣化

第2章 「開戦の責任」と十二月八日

43

アメリカが「真珠湾」から学んだこと／日米の「情報」に対する考え方

在ワシントン日本大使館の十二月八日／日本人が総括できない「通告遅延問題」
東條内閣と過剰な秘密主義／「戦ニ勝ツノニ都合ノヨイ様ニ外交ヲヤツテクレ」
御前会議での不思議な議論

第3章 「日米の記憶」と十二月八日

89

今上天皇、四つの記憶／「愚か者の碑」と「原爆記念碑」

アメリカの「正しい戦争」の記憶／日米の記憶の隔たり

歴史の記憶とナショナリズム／ピン・ラディン殺害と真珠湾を結ぶものの歴史から方程式をつくれなかつた日本人

第4章 臣民と市民の十二月八日

123

臣民にとつての十二月八日／作家たちを戦争に協力させたもの
開戦詔書と忠臣蔵の共通点／不明瞭な日本の戦争目的
ヘレン・ミアーズが見た日米戦争／口を割らないアメリカ人捕虜
開戦詔書に入れて欲しかつた一文

第5章 十二月八日と「ヒロシマ」

161

国を誤らせた陸軍大学の教育法

ドレスデン空襲式典から考える「真珠湾とヒロシマ」

戦争被害者の序列／日本はなぜ、アメリカに復讐しなかつたか
責任なき開戦、そして戦友会のこと／真珠湾とヒロシマを語つていくこと

第6章 八月十五日と日本人の「涙」

197

「制限」か、「従属」か／八月十五日と九月一日

終戦で流れた日本人の「涙」／涙が覆い隠した八月十五日の本質
消えた軍需物資と特攻隊のこと／一百三十四年間で三百六十六回の戦争
欠けていた末端兵士たちの証言

第7章 東京オリンピックまでの八月十五日

235

「二億総懺悔論」の登場／昭和三十年代の「人物論」はなぜ面白いか
政治家・有田八郎の戦後／憲法九条「戦争放棄」を評価した石原莞爾
評伝が育たない日本の風土／八月十五日を「恨みの日」にしなかつた日本人
終戦記念日がうながす歴史の忘却

第8章 高度成長時代の八月十五日

273

「コインの裏表」としての昭和十年代と四十年代
日本人は「最短距離で目標に到達する名人」?

「護送船団方式」の源は戦前にあり／僕の「全共闘世代」観
東大医学部教授陣の「軍人精神」／反戦自衛官と日本人捕虜のこと
タブーだった「ナショナリズム」／経済至上主義のなかの八月十五日
光クラブ事件と奥崎謙三のこと

第9章 八月十五日と靖国、昭和天皇

305

元軍人の取材で思ったこと／「八月十五日」が変質していく時代
A級戦犯はなぜ合祀されたか／矛盾を孕む靖国神社の歴史解釈

中曾根首相の靖国参拝に忠言した後藤田官房長官

「富田メモ」が突きつけたもの／和歌に表れた昭和天皇の心境
靖国問題がくすぶり続ける理由／東京裁判が見のがした事件
戦犯を自ら裁けなかつた日本／靖国問題がおおい隠すあの戦争の本質

第10章 平成時代の八月十五日

345

徳富蘇峰の大懺悔／平成になつて浮上した従軍慰安婦問題

ジエンダー論で割り切れない「戦場の性」

マイナス効果が目立つ日本の戦争謝罪

日本の国旗を焼いたイギリス人元兵士の「和解」／原子爆弾とジエノサイド

戦争を知らない世代に磨いてほしい想像力